

## コメント

### ——インドにおける日本文学・文化研究の将来に寄せて——

稲賀繁美

国際日本文化研究センターの稲賀と申します。簡単にコメントを申し上げ、そのあとで、ディスカッションに移りたいと思います。

最後にIT時代の科学分野での将来の協力ということをおっしゃいました。まだ小さな芽が出ているだけですが、関連する一つのアネクドートからお話します。

京都大学に桂の新しいキャンパスがありますが、そこにインドのIIT, Indian Institutes of Technologyから学生を派遣しようという動きも既に出かかっています。

例えば、ムンバイ出身で、インド人女性として最初にフランスのエコール・ポリテクニークに入学をしたという女性を私は個人的に知っております。彼女は将来日本のことを研究したくて、ポリテクニークのフランス人のお兄さんたちを引き連れて、一昨年でしたか、京都大学工学部に視察にやって来た。彼女は、もちろん英語はとてもよくできて、フランス語も完璧、しかも今度は日本語をやろうという、そうした大変な才能がインドにはたくさんいらっしゃる。将来ここから新しい道が開けていくのではないかと思います。

ただ、いま申しましたように、そうしたかたちでの日本とインドとの将来の知的・学術的協力という、これはやはりテクノロジーの分野であるとか、ビジネスであるとか、そうした方面に大概の人が行ってしまう。そうするといわゆる地域研究、エアスタディーズとか、文学あるいは文化研究、カルチュラル・スタディーズなどに、いったいどこまでの重きが置かれるのか、という問題が当然発現してくると思います。

Georgeさんもちろん日本語を教えていらっしゃるという立場で、日本語のプロモーションを含めて日本研究を通した日印関係の増幅ということを考えていらっしゃる。しかし、どうやらマーケットのほうは、政治家を含めて少し違う方向に関心が向いている。そうした状況も、いまのGeorgeさんの報告から見て取れたのではないかと思います。

それを踏まえて、三つぐらいの論点を挙げたいと思います。一つはいま申しましたことにもかかわりますが、ジャパニーズ・スタディーズと言った場合に、それをどう定義していくのかという問題ですね。

自然科学系のことはちょっと置いておきましょう。こうした分野での教育は、現実には日本でも英語でなされていますから、インドの学生の場合、日本に来て自然科学関係の科目を学ぶのには、必ずしも日本語の知識を必要としない。桂の京都大学のキャンパスでも留学生の多くは、研究上では日本語を必要とはしていません。

次にソーシャル・サイエンスですが、この場合、アウトプットは英語でしてしまえばよいということになれば、最低限日本で生きていて、インフォメーションを捕まえる能力さえあれば、それで日本でビジネスが十分できる。実際そういう方たちがいまインドから日本の霞が関や丸

の内などにどんどん進出していることは、みなさんもお存じだと思います。ビジネス・パートナーとしてインド人たちがたくさん入ってきていて、実際既に、日本の企業がインドに進出する場合の仲介となるような仕事、メディエーターの仕事をしている。

そのうえで、いわゆるヒューマニティーズにおける研究をどう進めるかという問題が出て参ります。日本語を学習するのは、インドの場合でも大変に頭のいい方々が多いわけですが、それでもかなりの障害を伴う。けれども、せっかく日本語をマスターしたからといって、それでいたいマーケットにどれだけの需要があるか、というところで一つ問題に直面します。そこにGeorgeさんのご苦労の一つもあると思います。それが第一点。

実利主義ということをおっしゃいましたが、中国の場合などを見ていると、やはり日本研究をやった方たちの男性の多くは、マスターまで行ってしまうと、すぐ企業に行ってしまう。そうでなければ、いわゆるダブル・メイジャーで、マスター・オブ・ビジネス・アドミニストレーション(MBA)と掛け持ちの単位を取ったうえで、日本関係の企業に就職する。これも最近の北京では、英語のほうが優先順位も高いのは、否定できません。

博士課程に行ったとしても、どうせあとでお金もうけなどできない、ということはみんな知っている。そうすると、金もうけなんかに興味はないけれど、それでも日本を研究対象にしたい、という方が初めて文学研究、文化研究にやってくる。これはもとより仕方がない状況で、むしろそういう初期条件のなかで、どれだけいい人材を集めるか、というところが一つ大切だろうと思います。

そこから大きな第二番目の論点に移りたいと思います。すなわち、今度は日本側の対応です。日本側のインド研究となると、大まかに二つに分かれます。ヒューマニティーズの場合ですが、古典研究と地域研究とのふたつです。仏教学のようなクラシックをやっている人と、人類学で地域研究のエリア・スタディーズやカルチュラル・スタディーズをやっている人とに分かれてしまう。その結果、いわゆる比較近代化の問題などは、大多数の日本のインド研究者の視野から、すっぱり落ちてしまっているということがございます。

さらにもう一つ。日本側から現地で提供される教育を見ると、日本語教育については専門家がいらっしやる。これは皆様よくご存じのことと思いますが、その日本語教育の専門家と、今回お集まりいただいているような日本文学やヒューマニティーズの専門家とのあいだのコミュニケーションが非常に悪い。ほとんどディスコミュニケーションに等しい状態が存在する。国際交流基金もそのあたりでは、いろいろ悩みを抱えているかと思います。

この壁をどうにかして取り払わないと、日本側が本来提供すべきものがきちんと戦略として確立してこない、という認識を私は持っています。ただ、この点に深入りすると国際交流基金の方々にご迷惑がかかりますので、指摘だけでやめておきますが、これが、大きな三つ目の観点です。

それらを踏まえて、今回ここでは文学研究とりわけ、日本文学および文学研究理論ということが問題になっています。

ここからは私の提案ですが、いわゆる文学と言った場合に、古典なり日本近代の代表的な作品なりの研究はもちろん必要ですが、しかし、それだけに対象を限定するのは、かえって不利なのではないでしょうか。

さらに第二点として、東南アジアの場合には、日本のいわゆるサブ・カルチャー、ポピュラー・カルチャーが大変に流行（はやっ）ていて、学生が飛びつくと、教師のほうも、さあたいへんだということで、若者たちに追いつかなければ、となってしまうのですが、インドはその点では、かなり様子が違うというお話がありました。このへんも、将来、10年20年先のことを考えて作戦を立てていく必要があるだろうという気がしております。

そまでお話をして、少し具体的な例を挙げさせていただきます。Georgeさんは島崎藤村の研究をしておられますが、島崎藤村は実は1936年に日本代表としては初めて、国際ペンクラブに参加している。これはブエノスアイレスで開催されたわけですが、インド洋を越えて南米へと赴く途上、船旅の道中でインドの知識人たちと交流しています。

そのときのインド代表がカリダス・ナグーという人で、法律家・哲学者であるとともに考古学に通暁していた人ですが、このナグーは、戦時中にかけて日印関係の文化交流にずいぶん功績を上げた人で、タゴール家とも密接なつながりを持っています。ところが、いまナグーといっても、日本で知っている人はほとんどいない。さらに時代を遡ると、岡倉天心すなわち、岡倉覚三との周辺でも、例えば今日持ってきましたが、ロストム・バルーチャという演劇の専門家がいて、彼もいわゆるペルシア系の末裔、パルサイの人です。そのバルーチャの著作、*Another Asia* という本が2年ぐらい前に出ましたが、これは北米のインドやアジア研究ではずいぶん話題になったようです。ただ、彼自身、日本語はできません。できないけれども、これだけの本をつくってしまう実力もっている。

岡倉とタゴールとの、いわば intellectual exchange インテレクチュアル・イクスチェンジ。それにつづき、ヨネ・ノグチ——彫刻家の、イサム・ノグチのお父さんですが——とタゴールとのあいだには、有名な論争があります。そのやりとりを彼は見事に復元して論点を炙り出した、そうした研究書が出版されている。さらに政治史とのかかわりでは、インドと日本の関係を見ると、ボースという名前の有名人がふたりいるわけで、一人はチャンドラ・ボースですね。いまでもベンガルには銅像が立っている英雄ですけれども、日本を仲立ちにしてインド独立に挺身した政治家として、例えば長崎暢子先生にご研究があります。さらに最近では中島岳志さんが今日のインドのナショナリズムの研究とも平行して、もう一人の、中村屋のボース、ビハリ・ボースについて、詳細な評伝をまとめておられる。さらにそこには、日本と交友の深かった、画家のノンドラル・ボースを付け加えてもよいかもしれません。このように、政治史や国際関係論、さらには文化交流史にかかわる分野で、戦前から戦時中に何があったのかを、もう一度考え直していかないと、日本とインドの文化研究はできないだろう。そうした観点も必要ではないかと思えます。

こうした例から見ても、狭い意味の文学からはちょっと離れて、日本とインドの近代以降の歴史を含めた文脈での交流を洗い直してみると、われわれの将来にとっても参考となる資料がいくつも出てくるのではないかという気がしております。宮沢賢治などについても、そういう視野で見直していくと、また新しい視野が開けてくることと思えます。

実際に学会の動向を見ても、例えば北米、ニューヨークのコロンビア大学にはインド出身の文学理論研究者で大変有名な女性学者にガヤトリ・スピヴァックという人がいますが、彼女は一応「比較文学者」。そして比較文学の学科は、実は10年ほど前に、コロンビア大学で

英文科に対して独立宣言 Declaration of Independence を突きつけて、袂を分かってしまった。つまり、比較文学は、英文学の植民地をなすコロニアル文学研究ではない、というわけです。この独立宣言のおりに、彼女は East Asian Cultures and Languages の人たちにも声をかけている。実はそういうかたちで北米などでは、日本研究をやっている北米研究者たちとインド出身の学者たちとのあいだに、実質的な交流もある程度は進んでいるわけです。

それに比べると日本では、かえって専門が縦割りに分かれてしまっているために、そうした交流があまりに停滞している。このあたりにも問題が伏在しているかと思います。

『立命館言語文化研究』編集委員会

委員長 Charles E. FOX  
委員 西林孝浩  
ウエルズ恵子  
村田裕和

---

---

立命館言語文化研究 21巻3号(通巻99号)

2010年1月25日 印刷

2010年1月29日 発行

発行者 Charles E. FOX

発行所 立命館大学国際言語文化研究所  
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1  
TEL (075) 465-8164  
E-mail : genbun@st.ritsume.ac.jp

印刷所 (株)田中プリント

---

---